案内状を出せば必ず法事は増えるか

「法事を忘れる人が増えてきた」とは関西地方の真宗寺院の嘆きだ。年忌を思い出してもらい、法事を続けてもらうにはどうすればいいのか。様々な住職の実践に学ぶ。

上の写真は、六月中旬に都内の真宗寺院で行われた七回忌の法事の様子である。この日、同寺に集まった親族は十三人。「最近は、これぐらいの人数で行われる方が多くなってきましたね」

そう話すのは同寺の住職夫人だ。法事の件数だけでなく、法事に集まる人も減っているといわれる現代の風景である。

こうしたなか、個々のお寺だけでなく、僧侶同士が独自にプロジェクトを立ち上げて、何とか法事を続けてもらおうとしている動きがある。特集第二回目の今回は、今年五月から始まった、仏事を増やす仏教プロジェクトからご紹介しよう。

法事を増やすプロジェクト?

神奈川県横浜市南区の**曹洞宗貞昌院**では、毎年お正月に、その年の年忌にあたっている故人の戒名と忌日、それに檀家の苗字を全て本堂に張り出す。これが同

上の写真／七回忌を営む門徒（東京・真宗寺院）

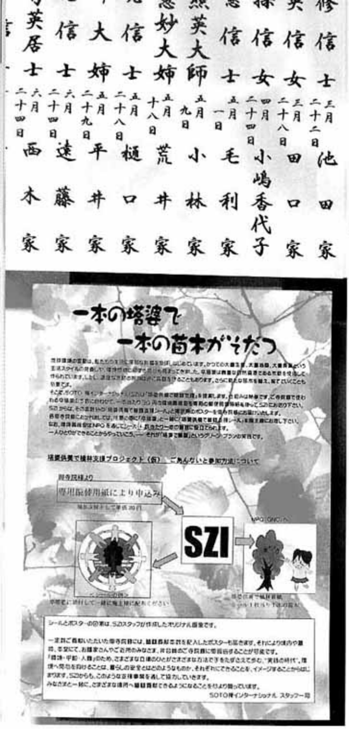
寺の法事をすすめる方法だ。

　が、この五月以来、年回忌票を見上げる檀信徒の視界にポスター（左の写真）も入ることになった。そこには、こう記されている。

《一本の塔婆で一本の苗木がそだつ

**　地球環境の変動は、私たちの生活に深刻な影響を及ぼしはじめています。かつての大量生産、大量消費、大量廃棄という生活スタイルの見直しや、環境問題に対する関心も高まってきました。卒塔婆は貴重な自然資源である木材を使用して作られています。しかし、適度な木材の利用は逆に森林を守ることもあります。さらに新たな苗木を植え、育てていくことも必要です。そこで、SOTO禅インターナショナル（SZI）は「塔婆供養で植林支援」を提案します……》**

植林証明シールを貼った法事の塔婆



年回忌票の下に塔婆植林ポスター

　なんと、法事やお施餓鬼などにあげる塔婆で植林支援を行うというのだ。「SOTO禅インターナショナル（以下SZI、HPは http://www.soto-zen.net/）」（福島仲悦会長）とは、海外布教経験をもつ曹洞宗僧侶などで結成された任意のネットワークのこと。会員制で様々な国際布教に力を入れている。事務局長をつとめるのが貞昌院の**亀野哲也副住職**（四十三歳）だ。塔婆供養が、どうやって植林につながるのだろうか。

　「"商品を買えば購入代金の何割かが発展途上国支援にあてられる"というキャンペーンを想像していただければいいと思います。それの塔婆版をSZIで立ち上げたんです。つまり、一本の塔婆供養費に一本の植林費用を含ませているのです。一本、塔婆をあげれば、檀家さんは自動的に一本、木を植えたことになるんです」と亀野事務局長は話す。

　檀家の供養意識と、エコロジーに対する啓発活動だ。実際の流れを見よう。

❶まず、寺院住職は、お寺で使う塔婆の本数を計算。一本あたり、三十円を『環境義捐金』という名目で、SZIの口座に郵便振替用紙で振り込む。

❷SZIは振り込みを確認し、塔婆の本数にあわせたシールと、何本の植林をそのお寺で賄ったかというロットナンバーを印刷した証明書、それに檀信徒向けの先述の啓発ポスターをお寺に発送。同時に、振り込まれた『環境義捐金』は協同のNPOを通じて植林にあてられる。

❸届いたシールを住職は塔婆に貼り（**前頁の写真**）、法事で供養する。檀家はあげた塔婆が植林につながったことを確認できる。

　曹洞宗僧侶が中心だが、「他宗派のお寺もぜひ利用してほしい」と亀野事務局長。貞昌院では、既に法事の際に使っている他、今年の施食会にあわせて塔婆シールを購入した。

　だが、協賛寺院に送られるポスターやシール代などの経費も相当のもの。踏み切ったのはなぜか。

　企画発案者でSZIの**飯島尚之副会長**（東京都中野区・宗清寺住職、五十歳）にプロジェクトの真意を尋ねた。

「企画は、環境問題とお寺の役割を、どうつなげるかということでした。きっかけの一つが、仏事の変化です。法事の減少と共に法事の参列者が少なくなりました。一つの家族単位の人数も少なく、お寺の収入にも影響します。もう一つが、塔婆をなぜ立てるのかなどの理解が、若い人には伝わらない。割り箸でも環境問題が問われる時代に、塔婆はかえって敬遠されるのではないかと思ったのです」

　そこで、SZI十五周年記念事業として、立ち上げたのがこのプロジェクトだった。反響は上々で、提案二カ月で既に一万五千本の植林が行われている。

　ポップなシールの裏には、お寺の将来を憂慮した住職たちの思いがあるわけだ。

案内状で法事が二十件増えた

　時代の変化に敏感な、他のお寺はどうしているだろうか。

　年忌の案内状を送るお寺から見よう。下町情緒の残る東京都江戸川区。**真言宗豊山派密蔵院の名取芳彦住職**（四十九歳）が、檀家のおばあさんから思わぬ依頼を受けたのは、十五年前のことだった。

　「〝だんだんと年忌法要の日がいつか分からなくなってきた。住職さんのほうから教えていただけたらありがたいんだけど〟と言われたんです。思いもよらなかったし、そんなものかなと感じました」

　密蔵院のある地域は、本家新家の結びつきが強い。法事の日取りも、「今年はそうじゃないの」なんて檀家同士で話していた。同寺では三十三回忌まで勧めているが、先代の頃は「何も言わずとも自発的に法事をしてくれた」という。

　だが、おばあさんの申し出に、変化を感じ取った名取住職。すぐにその年から案内状を送ることにした。

　案内状は、新年の挨拶と兼ねて行う。このため、密蔵院の新年の挨拶文には二通りある。B4用紙に縦書きで、新年の挨拶文や護摩の案内が綴られるが、年忌にあたっている家には、紙面の最後に一